

# ゾウの時間ネズミの時間

—— 映画文学人生論

本川達雄 (1948-)

『ゾウの時間ネズミの時間』(1992)「中公新書」

『「長生き」が地球を滅ぼす—現代人の時間とエネルギー』(2006)「阪急コミュニケーションズ」

『生物学的文明論』(2001)「新潮新書」

哺乳類では、どの動物でも、一生の間に心臓は 二十億回打つ

本川達雄『ゾウの時間ネズミの時間』のサブタイトルは「サイズの生物学」。動物のサイズと時間との関係を解説している。

いろいろな哺乳類で体重と時間とを測ってみると、時間は体重の $\sqrt{4}$ 乗に比例するという。文科系の頭ではわかりにくいだが、要するに、ゾウにはゾウの時間、ネズミにはネズミの時間、人間には人間の時間があり、それぞれ体のサイズに応じて、違う時間の単位がある。これを物理的時間に対して生理的時間というらしい。

物理的時間で測れば、ゾウはネズミより、長生きだ。ネズミは数年しか生きないが、ゾウは一〇〇年近い寿命をもつ。ところが、生理的時間でいえば、それほど変わらない。ゾウもネズミも生理的にはほとんど同じ時間だけを生きる。

寿命を心臓の鼓動時間で割ると、哺乳類では、どの動物でも、一生の間に心臓は、二十億回打つという。また、同じ著者の『「長生きが地球を滅ぼす」によれば、哺乳類の心臓は十五億回打って止まることになっている。

二十億回と十五億回——どちらが正しいかはどうでもよい。問題は、人間の時間が私に残っているかどうかだ。正確に測っていないので、なんともいえないが、私の心臓はすでに二十億回の予定回数を打ち終えてしまったのではなからうか。



## 映画文学人生論

# ゾウの時間 ネズミの時間

哺乳類の体重を六十キログラムとして寿命を計算すると二六・三年。つまり、ヒトのサイズの動物の寿命は二六・三歳となる。発掘された縄文人の骨を調べて求めた値は三一歳だから、縄文人の寿命は哺乳類の平均に近い。

それに対して、現代日本人の平均寿命八十歳というのはあきらかに異常だ。これは、自然のままの動物としての寿命ではない。現代文明がエネルギーを使ってつくり出した人工的な寿命だ。

安定した食糧供給、安全で清潔な都市づくり、頼れる医療——これらは莫大なエネルギーを使用することによって成り立っている。エネルギーという代価を支払って寿命という時間を買っているのだ。

石油や石炭のようなエネルギー資源は、このまま使い続ければ近い将来になくなってしまう。原子力の平和利用（？）は、出てくる核廃棄物が世代を越えて後世の重荷になる。ぜいたくなエネルギー消費はつけを子孫に払わせるようなものだ。

要するに、私が長生きをすればするほど、地球の滅亡がはやまるということになる。どうすればよいか。おりん婆さんにならって檜山へ行くべきかもしれないが、それは先送りにして、とりあえず、物理的時間を生理的時間にきりかえ、ナマケモノのように省エネの生き方をしてみよう。

ぼくの名前は ナマケモノ

なまけてなんかはいないんだよ

ぼくらの時間は ちがうのさ